

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 宮古諸方言の音韻：体系と比較

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ペラール, トマ, 林, 由華 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002461">https://doi.org/10.15084/00002461</a>

## 宮古諸方言の音韻

### —体系と比較—

トマ ペラール・林 由華

#### 1 はじめに

宮古諸方言は、沖縄県宮古島市および多良間村で話される南琉球諸方言の一種である。集落ごとに方言が異なり、差異の程度の違いはあるが 30～40 の方言があると考えられる。本稿では、このうち、2011 年 9 月に調査を実施した上地、与那覇、久貝、伊良部、保良、国仲、大浦、島尻、来間、池間、狩俣、砂川、野原の 13 地点からのデータを中心として、宮古諸方言の音韻を歴史言語学上の音対応に基づいて整理し、その全体像を示す。従来、音対応というと、日本（古）語との対応の考察が主になっているが、ここでは必ずしも日琉祖語まで遡るわけではなく、主に方言間の比較のための宮古祖語の段階における対応関係を見る<sup>1</sup>。（特に指定されていない場合、祖形の標識である\*は宮古祖形を示している。）

宮古諸方言の音韻についての先行研究としては、平山・大島・中本(1967)、中本 (1976)、平山(編)(1983)、名嘉真 (1992) などに、各地の音素や音韻の特徴がまとめられている。最近でも、中本 (2000)、仲原 (2002)、下地 (2003)、かりまた (2005)、Shimoji (2008, 2011)、Pellard (2009, 2011)、Hayashi (2011) など、個別の方言の音韻体系の調査・研究も進められており、各地の音韻が明らかにされつつあるが、宮古諸方言の音韻の解釈については研究者ごとに大きく異なっている。宮古諸方言には、子音的噪音が自由変異として現れる母音や、特定の母音の存在を音声・音韻的に認めることが困難な音節が存在し、その音価や音韻的解釈を巡ってさまざまな議論がなされている。この議論の中心にあるのが、中舌母音もしくは舌先（尖）母音と呼ばれたり、[s~z] の音価を持つ成節子音として分析されることもある、子音的要素と母音的要素の両方ををあわせもつ音素である。このほかに、v や r ([ɹ]) が成拍的になりえること、また音声的にも広母音であっても無声化しやすいという性質などがあり、（少なくとも音声上の）音節の中核を子音的要素が占めることが多く、「子音性が強い」（沢木 2000）方言群とされる。これらを含めた音韻解釈に関する問題は、北村 (1960)、かりまた (1986, 1987)、加治工 (1989)、沢木 (2000) などでも考察されているが、未だ多くの課題がある。この問題の多くには、子音と母音のあり方が日本語などと大きく異なるため、どのような分析の枠組みを用いるのかの違いに由来した意見の相違も含まれていると考えられる。本稿で扱えるのはこの問題のごく一部であるが、研究史上で詳細に議論さ

---

<sup>1</sup> 宮古祖語の再建形については Pellard (2009)、琉球祖語の再建形については Thorpe (1983) を基にしている。

れることの少なかった形態音韻現象について考察を加え、宮古諸方言の音韻特徴の一端を示したい。

上述の問題に対する議論も含めつつ、本稿では、宮古祖語で想定される各音素が各地でどのように現れているのかを見ることにより、宮古諸方言としての共通点と方言間の相違点をまとめる。また、ここでの表記は簡易音声表記であり、表中のデータにはそれぞれの調査者によるものをを用いた<sup>2</sup>。本稿で扱うのは分節音のみであり、アクセントなどの音調は考慮しないため、データ中に音調上の特徴が記録してあっても、それは本稿中には含めていない<sup>3</sup>。

## 2 母音

### 2. 1 母音の種類と特徴

ここでは、宮古諸方言の各母音音素ごとに、調査により得られた各地の語例と音価を示す。また、各地で個別に起こった音変化や例外的音対応については、別途語例を提示する。

本稿で用いる調査結果から得られる宮古諸方言の母音の種類は、/a, e, i, o, u, ɿ/ の6種類である。これらは長短の区別をもつが、/e, o/ については母音連続から変化したものであり、借用語をのぞいて基本的に長母音のみである。また、本稿の対象方言にはないが、これに加えて多良間方言には /ë:, ü:/ が認められる（下地 2003 など）<sup>4</sup>。調査対象となっていた方言のうちでは、/a, i, u, ɿ/ の4つの母音を持つもの、/a, i, o, u, ɿ/ の5つのもの、/a, e, i, o, u, ɿ/ のものがある。また、/ɿ/ は、中国語やバンツー諸語にみられるような **fricative vowel** といえる (Ladefoged and Maddieson 1996) 音素であり、子音的噪音を持ち合わせた母音である。なお、本稿では母音としているが、子音ととらえる解釈も存在する。

#### 2. 1. 1 広母音

/a/ 非円唇広母音[a]～[ɑ] < \*a

宮古祖語の \*a にあたる音で、各方言で [a]～[ɑ] で現れる<sup>5</sup>。

<sup>2</sup> 一度の調査で主に一人の話者から得られた発話の音声的表記である性質上、誤記と思われるものも存在する。解釈にあたっては、著者の知識の範囲内で修正したものもあるが、その場合は都度明示している。

<sup>3</sup> 音調については、五十嵐ほか (2012) などによって、これまで2型とされてきた池間方言が3型であることが示されるなどの研究の進展がある。

<sup>4</sup> さらに、大神方言には\*ɿを由来としつつも摩擦音を伴わない /w/ も存在し、また母音体系も他方言と異なり /ɑ, ɛ, i, u, w/ となっている (Pellard 2009)。

<sup>5</sup> 後述するように、方言によってはこれに対応する音が /u/ で現れる場合があるが、体系的な音変化の結果ではない。

表 1 非円唇広母音

	A-187	A-062	A-174	B-060	B-002
	あそこ	蚊	砂	羽	歯
上地	kama	gaɖam	ɱnagu		pa:
与那覇	k <sup>h</sup> ama	gaɖam	nnagu:		
久貝	k <sup>h</sup> ama	gaɖam	m <sup>h</sup> nagu		
伊良部	k <sup>h</sup> ama	gaɖam	mnagu	pani	pa:
保良	k <sup>h</sup> ama	ga <sup>d</sup> zam	nnagu:	p <sup>h</sup> ani	p <sup>h</sup> a:
国仲	kama	kadam	ɱnagu		
大浦	k <sup>h</sup> ama	ga <sup>d</sup> zaŋ	nnagu	pani	pa:
島尻	kama	gaɖaŋ	nnagu	p <sup>h</sup> aŋi	p <sup>h</sup> a:
来間	kama	gaɖam	m:nagu		
池間	kama	kaɖaŋ	nnagu	hani	ha:
狩俣	kama	ga <sup>d</sup> zaŋ	nnagu	pani	pa
砂川	k <sup>h</sup> a <sub>ɕ</sub> ma:	gaɖam	ɱnagu		
野原				pani	pa:

## 2. 1. 2 狭母音

/i/ 非円唇前舌狭母音 [i] ~ [ɪ] < 宮 \*i

宮古祖語 \*i に対応する音で、各地で [i] ~ [ɪ] で現れる。狩俣では、\*i が /ɿ/ に対応している語がある。池間では、宮古祖語 \*ɿ が /ts/, /z/, /s/ の後を除き /i/ と合流している（/ɿ/ の項目で後述）。また、伊良部においては、宮古祖語で \*(C)ja にあたる音が ii に変化している語がある。

表 2 狭母音

	A-170	A-059	A-129	B-093	A-110
	海	女	風	篋	木
上地	iɱ	midum	kaɖɿ		ki:
与那覇	im	midomu	k <sup>h</sup> aɖɿ		ki:
久貝	im	midum	k <sup>h</sup> aɖɿ		ki <sup>h</sup> :
伊良部	im	midum	k <sup>h</sup> aɖɿ	pira	k <sup>h</sup> i:
保良	im	midum	k <sup>h</sup> a <sup>d</sup> ɖɿ	p <sup>h</sup> ira	k <sup>h</sup> i:

国仲	im	midum	kaɕi		kiː
大浦	iŋ	miduŋ	kʰadzi	pira	kʰiː
島尻	iŋ	miduŋ	kʰaɕi	pira	kiː
来間	im	midumu	kʰaɕi		kiː
池間	iŋ	miduŋ	kʰadi	hira	kiː
狩俣	iŋ	miduŋ	kʰaɕi	pira	kiː
砂川		midum	kaɕi		kiː ~ kiː
野原				pira	

表 3 i の一部が ɿ に対応：狩俣

	A-016 髭・毛	A-103 にんにく
上地	pʰigi	pʰil
与那覇	pʰɿgi	pʰiʰɿ
久貝	psgi	pʰiz
伊良部	pʰɿgi / fʊʈɿpʰɿgi	pʰiɿ
保良	pʰɿgi	pʰiʰɿ
国仲	pʰigi	pʰil
大浦	pʰɿgi ~ pɿgi	pʰiɿ
島尻	bʰɿgi	pʰiʰɿ
来間	psgi	piz
池間	higi	hiː
狩俣	bzɡw ~ bzɡi ~ biɡi	pʰiː
砂川	psgi ~ pʰɿgi	piz ~ piː
野原		

表 4 \*(C)ja > ii : 伊良部

	A-165 昔	A-189 ない	B-029 一人
上地	ɲkjaːŋ		
与那覇	ɲkʰjaːŋ		tɔʊkʰjaː
久貝	ɲkjaːŋ	nʰjaːŋ	tɔʊfkeː

伊良部	mki:ŋ	ni:ŋ	tauki:
保良	ŋkʲa:ŋ	nʲa:ŋ	taukʲa:
国仲	ŋkja:ŋ		taʷkʲa:
大浦	ŋkʲa:ŋ		tavkʲa:
島尻	ŋkja:ŋ		tʰafkja:
来間	ŋkja:ŋ	nʲa:ŋ	
池間	ŋkʲa:ŋ	nʲa:ŋ	tauka:
狩俣	ikja:ŋ	nʲa:ŋ	taɸkʲa:
砂川	ŋkja:ŋ		tavkʲa:
野原			tavkja:

/u/ 円唇後舌狭（緩み）母音[u]～[ʊ] < 宮\*u

宮古祖語 \*u に対応する音で、各地で[u]～[ʊ]で現れる。また、各地でこれに対応する音が a で現れている語が散見されるが、規則的な対応ではない。

表 5 円唇後舌狭母音

	A-028	A-030	A-060	A-071	B-069
	骨	心臓・肝	人	馬	穂
上地	puni	kɕimu ~ kimu	pɿsu	nu:ma	
与那覇	puni	k <sup>s</sup> ɿmu	p <sup>s</sup> ɿtʰu	no:ma	
久貝	p <sup>h</sup> uni	k <sup>sz</sup> imu	pstu	nu:ma	
伊良部	p <sup>h</sup> uni	tsɿmu	pstu	nu:ma	pu:
保良	p <sup>h</sup> uni ~ puni	k <sup>s</sup> ɿmu	psto	no:ma	p <sup>h</sup> u:
国仲	puni	tsimu	p <sup>h</sup> ɿtu	nɯ:ma	
大浦	p <sup>h</sup> uni	k <sup>s</sup> ɿmu	pstu	numa	p <sup>h</sup> u:
島尻	p <sup>h</sup> uni	k <sup>s</sup> ɿmu	ttu	nu:ma	pu:
来間	p <sup>h</sup> uni	tsimu	pstu	nu:ma	
池間	huni	tsimu	p <sup>h</sup> ɿtu ~ ɕtu ~ ɕto	nu:ma	hu:
狩俣	p <sup>h</sup> uni	k <sup>s</sup> imu	pstu	nu:ma	pu:
砂川	pɯni ~ p <sup>h</sup> uni	ksmu ~ k <sup>s</sup> ɿmu	pstɯ ~ pstɯ	nu:maɰ	
野原					pu:

表 6 u : a の不規則的な対応の例

	A-132 雲	A-032 膝	A-079 卵	A-115 福木
上地	kumu	tsigusi	tunaka	pʊkukugi
与那覇	fom	tsɪgʊsɪ	tʰʊnaka	pʰʊkugi:
久貝	fumu	tsīgusi	tunakʰa	pʰukaɖgi:
伊良部	fumu	tsɪgʊsɪ	(kʰu:ga)	kuputsɪgi
保良	fomu	tsɪgʊsɪ	tʰʊnaka	fʊkʊkɪgi:
国仲	fumu	tsigusi	tunuka	pʊkutsigi·
大浦	kʰumu	sugasɪ	tʰʊnaka	pʰukagi
島尻	fuma	tugʊsɪ ~ tugasɪ	tʰʊnaɕa	kʰʊpagʒgi:
来間	fumu	tsīgusi	tʰʊnuka	pukutsigi:
池間	m̥mu	sīgusi	tunuka	kutsigi
狩俣	fumu	tsīgasi	tunuga	pʰʊkagagi:
砂川	ɸʊmu	tsɪgʊsɪ ~ tugasɪ	tʊnaka	pʊkʊkuki: ~ pʊkukugi
野原				

### 2. 1. 3 半狭母音と二重母音

宮古諸方言における半狭母音は、主に母音の融合に由来している。/e/ については \*ai や \*Cja, /u/ については \*au や \*ua がその由来である。ただし、\*au < o: 以外の変化については、必ずしも一方方言内の同一環境内全てで起こっている訳ではない場合がほとんどで、例外も多い。

/e/ 非円唇前舌半狭母音

/e/ については、以下の二つの由来がある：

- \*ai : 一部の語彙に見られる
- \*Cja : -i で終わる単語の主題形から変化したものの例が中心

この融合の結果生じる /e/ については、現れない方言の方が多い。なお、下記のデータには/i/ [ɪ]の誤記例もある。

表7 \*ai 由来の /e/ : 与那覇, 久貝, 来間の一部の語彙

(\*ai > e の変化を受けていない語彙も参考にあげている)

	A-131	A-146	A-157	A-004		
	地震	南	夜	額	も	へ
上地	nai	p <sup>h</sup> ai				
与那覇	nai	pai	junai		mai / me:	ŋkai / ŋke:
久貝	nai	p <sup>h</sup> ai	jun <sup>j</sup> a:ŋ / june:	ftai	mai	ŋkai
伊良部	nai	p <sup>h</sup> ai	ju <sup>z</sup> ŋna <sup>z</sup> ŋ	fɯtai	mai	
保良	nai	p <sup>h</sup> ai	junai	fɯtai	mai	ŋkai
国仲	nai	paibara	junai	fɯtai	mai	nkai
大浦	nai	p <sup>h</sup> ai		fɯtai ~ ftai		
島尻	nai	p <sup>h</sup> ai				
来間	nai	p <sup>h</sup> ai	june:	fteʔ	me:	ŋke:
池間	nai	haibara		ftai	mai	ŋkai
狩俣	nau	p <sup>h</sup> ai		ftai	mai	ŋgai
砂川	nai	p <sup>h</sup> ai	junai		mai	ŋkai
野原						ŋkai

表8 \*Cja 由来の /e/ : 久貝の一部の語彙のみ

	A-165	A-189	B-029	
	昔	ない	一人	-i + は
上地	ŋkja:ŋ			
与那覇	ŋk <sup>j</sup> a:ŋ		tɔuk <sup>j</sup> a:	ja:
久貝	ŋkja:ŋ	n <sup>j</sup> a:ŋ	tɔfke:	e:
伊良部	mki:ŋ	ni:ŋ	tauki:	
保良	ŋk <sup>j</sup> a:ŋ	n <sup>j</sup> a:ŋ	tauk <sup>j</sup> a:	ja:
国仲	ŋkja:ŋ		ta <sup>v</sup> k <sup>j</sup> a:	ja:
大浦	ŋk <sup>j</sup> a:ŋ		tavk <sup>j</sup> a:	
島尻	ŋkja:ŋ		t <sup>h</sup> afkja:	
来間	ŋkja:ŋ	n <sup>j</sup> a:ŋ		ja:
池間	ŋk <sup>j</sup> a:ŋ	n <sup>j</sup> a:ŋ	tauka:	(j)a:
狩俣	ikja:ŋ	n <sup>j</sup> a:ŋ	taɸk <sup>j</sup> a:	ja:
砂川	ŋkja:ŋ		tavk <sup>j</sup> a:	ja:
野原			taukja:	



/o/ 円唇後舌半狭母音[o]

/o/ には以下の二つの由来がある：

- \*au：特に-a で終わる単語の対格形に多く見られる
- \*ua：-u で終わる単語の主題形のみに見られると考えられる

\*au 由来のものについては安定して /o/ で現れる方言が多いが、他の例と同じように語彙によって異なる方言もある（保良，来間）。なお、下記の例には /u/ [u] の誤記例もある。

表 9 \*au 由来の /o/：上地，与那覇，久貝，保良，大浦，来間，狩俣

\*ua 由来の /o/：久貝，国仲，来間，狩俣，砂川

	A-027	A-093	A-130	A-136	A-183		
	痒い	食べる	竜巻	青い	門	-a + を	-u + は
上地		fo:	amainoŭ	o:	ɕoʰ		
与那覇		fo:	amaino:	o:nu	ɕo:	o:	a:
久貝	k <sup>h</sup> o:munu	fo:	ama.ino:	o:	ɕo:	o:	o:
伊良部	k <sup>h</sup> o:munu	fo:	amaino:	o:	ɕo:vtsɿ		
保良	k <sup>h</sup> aukau	fau	amaino:	auau	ɕo: (保良) / ɕau (新城)	au	a:
国仲	kaumunu	fau	amainau	aũ	daũ	ao	u: / o:
大浦		fo:	amaino:	o:o:	ɕo:futsɿ		
島尻		fau	amaino:	aukaŋ	dau		
来間	koʔoko:		ama.ino:	au	ɕo:	a: / o: / au	o: / ua
池間	kaumunu		amaunau	aumunu	ɕau	au	u:
狩俣	ko:gaŋ		ino:	o:	ɕo:	au / o:	o:
砂川		fau ~ fau	amainau	au ~ au	ɕau	au	o:
野原							

## 2. 1. 4 特殊母音 /ɿ/

宮古祖語 \*ɿ に対応する音で、前より中舌狭母音[i]～非円唇後舌狭母音[ɯ]の音色に加え、歯茎の摩擦噪音をもつ、いわゆる **fricative vowel**（摩擦母音）に類する母音である<sup>6,7</sup>。頭

<sup>6</sup> \*ɿ に対応する音価については、長年その調音特徴を元にこれがどんな母音であるかという議論が続いていた（詳細はかりまた 1986 を参照）。ネフスキーによる宮古調査以来、中舌母音とするのが主流であったが、崎山(1963, 1965) や上村 (1997) かりまた (1996, 2005) などでは、これが調音音声学的に舌尖（尖）母音であると主張している。近年、一部の方言については、それが中舌母音の音色をもち（大野ほか 2000, 青井 2010）かつ s~z に近い位置での調音もなされており（青井 2010），中舌母音と舌尖母音両方の性質を持っていることが、機器分析・実

子音が無声子音の場合はその噪音も無声 [s] となり（例：上地「髭」 $p^{\epsilon}igi$ ），頭子音が有声もしくは頭子音を持たない場合は有声 [z] で現れる（例：与那覇「脚」 $p^hag^{\eta}$ ）。特に無声子音に挟まれた場合は母音自体が完全に無声化することがほとんどである（例：保良「光」 $pska\eta$ ）。逆に，特に頭子音がない場合や有声の頭子音があっても語末などでは，摩擦噪音が弱く、より接近音ないし母音に近い異音が実現する（例：上地「脚」 $pagi$ ）。狭めの程度については方言ごとの違いが予測されるほか，個人間，また同一個人の同一単語でもゆれがみられる（例：大浦「脚」 $p^hag\eta \sim p^hag^{\eta}$ ）。また，方言によっては，側面音にも聞こえるものがある（例：上地「椀」 $mak^{\chi}al$ ）。

なお，この母音がもてる頭子音はほかの母音より限られており，方言にもよるが最大で /p, b, k, g, ts, s, z, f, m/ である。池間では特に少なく，/ts/, /s/, /z/ の後ろ以外では /i/ に変化している。その他特筆すべきこととして，/m/ の後ろでは [i] のような二重母音に変化している方言が多いこともあげられる。

また，/ɲ/ は [z] ないし [s] で現れる場合もあることから，成節的な子音として解釈されることもある。例えば，「人」[pstu] の音韻表記のバリエーションの例としては， $p\ddot{u}tu \sim p\eta tu \sim p\ddot{z}tu$  などがある<sup>8</sup>。このように音韻解釈はさまざまだが，これを母音と見た場合でも，摩擦噪音をもつという点についてはそれぞれの研究者の観察は一致しており，また子音として見た場合は，母音のように音節主音にもなれる機能を持たせている。どちらにしても，子音的な性質と母音的な性質の両方をもった音素を想定することになる<sup>9</sup>。

表 10 特殊母音

	A-016	A-025	A-100	A-087	A-081	A-033	B-062
	髭・毛	血	椀	(ウニなどの) 肉・身	魚	脚	蠅
上地	$p^{\epsilon}igi$	$a\chi a^{\eta}tsi \sim ak a^{\eta}tsi$	$mak^{\chi}al$	$mi:$	$i^{\eta}zu$	$pagi$	
与那覇	$p^{\eta}gi$	$ak^h a^{\eta}ts\eta$	$mak^h a^{\eta}z\eta$	$m^{\eta}:$	$zzu \sim \eta zu$	$p^h ag^{\eta}z\eta$	
久貝	$psgi$	$akatsi$	$mak^h a^{\eta}zi$	$kadza^{\eta}sanumiz$	$zzu$	$p^h a^{\eta}d\ddot{z}i$	
伊良部	$p^{\eta}gi$	$ax a^{\eta}ts\eta \sim ahats\eta$	$maxa\eta \sim maha\eta$	$mi\eta$	$z\eta zu$	$p^h a^{\eta}d\ddot{z}\eta$	$paz$
保良	$p^{\eta}gi$	$ak^h a^{\eta}ts\eta$	$maka^{\eta}z\eta$	$m^{\eta}:$	$zzu \sim \eta zu$	$p^h a^{\eta}d^{\eta}z\eta \sim p^h ag^{\eta}z\eta$	$paz \sim paiz$

験により確認されている。これは，他言語での **fricative vowel** が母音的要素と子音的要素の二重調音的性格を持っているという報告とも並行するものである。

<sup>7</sup> 脚注 4 でも述べたように，大神方言には摩擦噪音なしの /w/ が存在し（\* $\eta$  由来），無声子音を頭子音にとっても無声化しない。（例：大神「字」[kw:]）(Pellard 2009)

<sup>8</sup> かりまた 2005 では，頭子音となる s や z の異音とする解釈の可能性も考察されている。

<sup>9</sup> 本稿ではこれを母音としているが，音韻記号として /i/ でなく /ɲ/ を用いる理由として，この音素の大きな特徴である摩擦性を含意して用いられているということがあげられる。

国仲	p <sup>h</sup> iɡi	ak <sup>ʰ</sup> atsi	makaɭ	tsimu(ウニ)	( <sup>i</sup> )zzu:	pazi	
大浦	p <sup>s</sup> ɪgi ~ pɪgi	ha:tsɪ	makaɪ	miɪ	ɪzu	p <sup>h</sup> agɪ ~ p <sup>h</sup> ag <sup>ʔ</sup> ɪ	pa <sup>ʔ</sup> ɪ
島尻	b <sup>ʔ</sup> ɪgi	aχatsɪ	maχaɪ ~ maχa <sup>ʔ</sup> ɪ	mi <sup>ʔ</sup> ɪ	zzu	p <sup>h</sup> agɪ ~ p <sup>h</sup> ag <sup>ʔ</sup> ɪ	paz ~ paɪ
来間	psgi	A: akatsi / B: a <sup>k</sup> xatsi	A: makaɭ / B: makaz	mi:	zzɸ	p <sup>h</sup> adzɪ	
池間	higi	akatsi	makai	mi:	zzu ~ ɖu	hadzɪ	hai
狩俣	bzɡu ~ bzɡi ~ biɡi	ha:tsi	ma:u	mi:	izu	p <sup>h</sup> agu	pai / pau
砂川	psgi ~ p <sup>s</sup> ɪgi	akatsɪ	makaz	mz:	zzu	pagz	
野原						pagɪ	pa <sup>ʔ</sup> ɪ

この母音に関しては調音特徴上の（音声学的）問題が長く議論されてきたが、これについては本稿では詳しく取り扱わない（脚注 6 を参照）。ここでは、この母音と深く関係した形態音韻論上の問題を取りあげ、宮古諸方言のもつ音韻解釈の問題について述べる。

### 母音があるのかないのか

宮古諸方言においてしばしば母音の有無が問題になる音節があるが、それは主にこの特殊母音が摩擦音・破擦音を頭子音に持った場合である。例えば、「牛」[usi] の s は母音を伴って usi や usɪ と解釈されたり、成節子音として usɸ と解釈されたりする。音声的には、この第 2 音節目は必ず無声で現れるというわけではないが<sup>10</sup>、このように解釈されるのには、主に形態音韻論上の現象に理由があると考えられる。

「音素があるか、ないか、子音なのか母音なのか」という問題は、それぞれの方言ごとに音韻システム全体を考慮して決定されるべき問題である。しかし、関連する音韻現象を包括的に考慮している研究は多くはない。本稿で方言ごとの問題全体を解決する議論をすることはできないが、ここではひとまず、母音の有無についての議論でしばしばとりあげられる形態音韻現象をの一つを取りあげ、問題解決にあたり考慮すべき点について考察する。また、これは未解決の問題であることもあり、本稿がとる表記・解釈は、宮古祖形に近い形をとり、成節子音かどうかははっきりしないものには母音を補った形で書く。

<sup>10</sup> 音声的に母音を挿入する場合もあるので、このこと自体がただちに音韻的に母音があることを示すわけではない。

# 名詞形態音韻論

問題となる音節の解釈に最も深く関わっていると考えられるのが、以下に説明する名詞形態音韻論上の現象である。宮古諸方言において、名詞の主題形、対格形は、付加される語の語末音の性質により以下のように異なった形で現れる。表 11 は、狩俣の例である。

表 11 狩俣方言における語末の音節の種類と主題形、対格形<sup>11</sup>

(-- 部分は未調査)

語末の音節の種類		主題形 (～は)	対格形 (～を)
C	海 im	imma	immu
	犬 in	inna	innu
	蛇 pav	pavva	pavvu
(C)V[+摩擦音]	牛 usɿ	ussa	ussu
	妻 tuzɿ <sup>12</sup>	tuttsa	tuttsu
	道 ntsɿ	nttsa	nttsu
	豆腐 toofu	tooffa	tooffu
	-pɿ	--	--
	紙 kabɿ	kabzza	kabzzu
	月 tsɿkɿ <sup>13</sup>	tsɿkssa	tsɿkssu
	脚 pagɿ	pagzza	pagzzu
	米 maɿ	mazza	mazzu
	傘 sana	sanaa	sanau
CV	酒 saki	sakjaa	sakjuu
	蛸 taku	takoo	takuu
(C)VV	木 kii	kiija	kiiju
	声 kui	kuija	kuiju
	字 zɿɿ	zɿɿja	zɿɿju
	屁 pɿɿ	--	--
CC	芋 mm	mma	mmu

表 11 で問題とするのは、語末が C もしくは(C)V[+摩擦音] (ɿ もしくは摩擦化した u) で終る場合に、子音重複がみられることである。ここでは、共時的解釈について検討する前に、まずこのような形が歴史的にどのように発生したかを簡単に見ておきたい。

<sup>11</sup> 表 11 のデータは、国語研の調査からのものに、著者個人の持つデータを補ったものである。表記は著者により変えている。

<sup>12</sup> 重子音となれる音の制限のために、無声であらわれていると考えられる。

<sup>13</sup> 国語研調査では tsksu の形でいるが、この形も存在する。

かりまた (1996, 2007) などでも述べられているように、宮古諸方言においては、特殊母音  $\text{ɿ}$  に後続する半母音  $w, j$  や流音  $r$  が摩擦音  $s, z$  になるという歴史変化が起っている<sup>14</sup>。

(1) は、かりまた (2007) からの例を表記をかえて用いたものである。

- (1) 「月」  $\text{tsɿkssu} < * \text{tsɿkɿju}$  (「つくよ (月夜)」に由来)  
「魚」  $\text{zzu} < * \text{ɿwu}$  (「いを」に由来)  
「白」  $\text{ssu} < * \text{sɿru}$  (「しろ」に由来)

主題標識、対格標識の宮古祖語における形式はそれぞれ  $*ja, *ju$  と考えられ、これらが  $*\text{ɿ}$  で終わる語に接続した場合においても、これと同様の変化が起っている。

- (2) 「髪を」  $\text{kabɿ} + \text{ju} > \text{kabɿ} = \text{zu} [\text{kabzzu}]$  (表 11 より)

表 11 にあるように、子音終わりの語においてもその子音が接続した  $j$  を同化するという変化が起っている (「海」  $\text{im}$  の対格形:  $\text{im} = \text{mu}$ )。ここでは変化のプロセスについて詳細な議論は行わないが、同様に  $\text{ɿ}$  終わりの語においても、この母音の持つ子音的要素が後続する  $j$  を同化したという現象だと捉えることができるだろう<sup>15</sup>。

ただし、表 11 で語末が (C)V[+摩擦音] としたもののうち、 $\text{sɿ}, \text{zɿ}, \text{tsɿ}, \text{fu}$ <sup>16</sup> については、大きく分けて 2 種類の解釈がある。それは、これらを  $\text{bɿ}, (\text{pɿ}), \text{kɿ}, \text{gɿ}, \text{mɿ}$  終わりの語と同様に音節核となる  $\text{ɿ}$  ( $f$  の場合は摩擦化した  $u$ ) をもつとし、母音が  $j$  を摩擦音にする規則を想定するか<sup>17</sup>、母音が脱落し成節子音となった  $s, z, ts, f$  が、 $m, n, v$  と同様に直接  $j$  を同化したとみるかである。

<sup>14</sup> このように摩擦母音が後続する子音に影響を与えることは、バンツー諸語の一部にも見られるものである (Ladefoged and Maddieson 1996)。

<sup>15</sup> かりまた (1996, 2007) では空気力学的観点からこの変化の原因を考察しているほか、青井 (2012) では、この変化のプロセスについて、自律分節音韻論的分析 (autosegmental phonology) により、 $/\text{ɿ}/$  の舌先性が拡張することによって半母音や流音が摩擦化したと説明している。

<sup>16</sup>  $\text{fu}$  は琉球祖語の  $*ku, *pu$  に由来している。これを  $f$  と捉えるかりまた (2007) によれば、「 $*u$  から変化した  $v$  が先行子音  $*p, *k$  を調音位置 (唇歯)、調音方法 (摩擦音) に変化を生じさせ、逆に、 $*p, *k$  は、後続の  $v$  を無声化させるという相互同化によって、 $f$  に融合したとかがえる (p.44)」としている。しかし、 $u$  の異音として  $v$  を残し  $/\text{fu}/$   $[\text{fv}]$  と解釈することも可能であり、その場合は特殊母音  $\text{ɿ}$  と同様に摩擦母音として、その唇歯での摩擦により  $j$  が同化したとできる。

また、 $\text{fu}$  (あるいは  $f$ ) が後続する子音を同化して生じた重子音を持つ語例は、他にも多くある。

例) 「黒」  $\text{ffu} < \text{furu}$  (「黒」に由来)  
「枕」  $\text{maffa} < \text{mafura}$  (「枕」に由来)

<sup>17</sup>  $C*\text{ɿ}$  ( $C$ : 破擦音)に  $*ju$  が後続する場合はさらに同化が起り、例えば  $*\text{tsɿ}$  に  $*ju$  が接続した場合には、 $\text{tsɿ} + \text{ju} > \text{tsɿsu} > \text{ttsu}$  となる。(歴史変化の例.伊良部「月」  $\text{tsɿkɿju} > \text{tsɿtsɿju} > \text{tsɿttsu}$ )

これはそのまま共時的な分析の問題にも繋がっている<sup>18</sup>。表 11 の主題形、対格形において子音が重複してあらわれる、語末 C および語末(C)V[+摩擦音] の語については、自身とは別に音節核 (ɿ) を必要とする p, b, k, g, m のグループ (グループ A とする) と、単独の成節子音として見ることができる m, n, v (グループ B とする)<sup>19</sup>があり、s, z, ts, f を A, B のどちらのグループにいれるのが解釈の上で最も大きな問題となる。その理由は、s, z, ts, f という成節子音を認めるかどうかという、音素配列や音節構造、音素のクラス分けという、一言語の音韻システムにとって極めて大きな問題に繋がっているためである。そして、この s, z, ts, f を成節子音と同じグループにいれるということが、冒頭で述べた「牛」us の 2 音節目には母音がないとする態度をとることである。大まかに言えば、表 11 の音韻現象をできるだけ統一的に解釈するための方法は、以下の 2 通りである<sup>20</sup>。

1. s, z, ts, f は グループ A の子音と同様、音節核 (ɿ など) を自身以外にもつ (成節子音として認めない)
2. s, z, ts, f は グループ B の子音と同様音節核を必要とせず成節子音となれる

音韻解釈にこの形態音韻論の問題を考慮する・しないにかかわらず、これまでの主流は 1 のように祖形における \*ɿ (および u) をそのまま残す解釈である。2 に類する研究には、かりまた (2005), Shimoji (2008, 2011), Pellard (2009, 2011) などがある。どちらが妥当な説明となるかについては、各方言ごとの音韻システム (音素体系、音素配列論、音節構造、形態音韻論) の全体を見なければ決定できないものであるが、以下では 2 をとった場合の利点や、従来説で問題となる点を挙げる。

宮古諸方言の中でも特に特殊な大神方言<sup>21</sup>においては、/m, n, f, s, v/ が成節子音であり、ほかの音節核 (母音) を伴わず独立しているという根拠が、表 11 のような名詞形態論以外にも存在する。例えば、大神においては「下」sta と「舌」suwa という対立があるが、大神には摩擦を伴わない u のほかに他方言にあるような摩擦母音を設定しなければいけない理由はなく、「下」sta の s は母音を伴わない音節とみなせる。鼻音や接近音に加え s, f も成節子音となれるのだが、流音 r は頭子音のみで、音節核としては機能しない。これは、流音は類型論的に摩擦音よりも成節的になりやすいとする理論 (Zec 2007) の例外となるものだが、このことはこの方言の音節を支える主たる性質が「聞こえ度の高さ」よりも「持続

<sup>18</sup> 以下特に明言はしていないが、共時的な分析においては必ずしも対格標識を祖形と同じ ju にする必要はなく u とできると考えられるが、方言によって異なる可能性もある。

<sup>19</sup> 国仲などでは、これにさらに /r/ [ɹ] が音節主音として加わる。

<sup>20</sup> 表 11 の現象は歴史的変化であり、共時的には単に名詞のパラダイムとして捉えればよいとする考え方もある。これは、共時的な説明項とみなさないということだが、文法に対する態度によっては十分ありうる解釈である。この場合、この形態音韻論上の現象は考慮せずに音素体系・配列や音節構造の整合性と音声事実に従って /ɿ/ 相当音の解釈を行うことになる。

<sup>21</sup> 有声・無声の対立および破擦音などは持たない。

性」に類するものであることを示していると考えられる<sup>22</sup>。これは宮古諸方言全体にわたる性質である可能性があり、その場合は 2 の解釈をより宮古諸方言の言語特徴を的確に反映したものとして捉えることができる<sup>23</sup>。

また、母音がないことを示すというわけではないが、s, z, ts, f が音節核を必要とするグループ A (p, b, k, g, m) と異なっていることを示すデータが、長浜方言を扱った Shimoji (2008) にも見られる。

- (3) a. 長浜「巢」 sïi<sup>24</sup> 対格形 sïi=u (本稿での解釈・表記の sɿɿ に対応)  
b. 長浜「日」 pžž 主題形 pžž=ža (本稿での解釈・表記の pɿɿ に対応)  
(Shimoji 2008 より)

このように、(3ab) は従来両者とも特殊母音の長音を持つと解釈されていた語だが、主題形にすると違いが生じてしまう。これは、グループ A の子音と s, z, ts, f を均質には扱えないことを示唆するものではあるが、(3a) のような振る舞いは、長音化が可能であるグループ B の成節子音とも異なったものである。(グループ B の成節子音は長音化でき、例えばそれが主題形になると「芋は」 mm=ma のように子音重複が起こる。) この場合、ほかのさまざまな音韻現象を見て、これらを AB どちらか近い方と同じ扱いにできるとしても、どちらも異なる別の規則が必要になる可能性があるだろう。

以上、宮古の名詞形態論を通して、「牛」 uʃ の 2 音節目に母音がないとする解釈が生じる形態音韻論上の理由について簡単に述べた。これらの問題は各方言ごとに検討されるべきものであり、例えば池間方言のようにグループ A の p, b, k, g, m の全てが頭子音として特殊母音と組み合わせることがない方言では、事情が大分異なる。

また、ここで見えてきたように、宮古祖語では子音もしくは摩擦化した狭母音が後続する半母音 w, j や流音 r を同化するという歴史的変化が起っており、共時的には、そのために生じた子音連続が多く見られるほか、動詞形態論における語幹末子音の重複という形などでも現れる。

- (4) 「虱」 ssam < sɿram (< 日琉祖語 sirami)  
「作る」語幹 : tsɿf- 「作らない」 tsɿf-fan (< 日琉祖語 tsukur-)

<sup>22</sup> 音節核になる音とならない音の違いは持続可能な音か瞬間的な音かの違いであると考えられ、これは Jakobson, Fant & Halle (1952) にみられる *continuant/interrupted* という素性に近い。

<sup>23</sup> 1 節で述べた「(少なくとも音声上の) 音節の中核を子音的要素が占めることが多い」のも、この性質と関係したものといえる可能性がある。

<sup>24</sup> Shimoji (2008) においても s, z, ts, f 相当の音は基底で成節子音として扱われており、この i は挿入母音となっている。

このような現象も含め、各方言内でその音韻全体がもっともうまく説明できるシステムの中で、母音の有無も決定されるべきであろう。

以上、特定の音節における母音の有無の問題について、宮古諸方言における名詞形態論をいかに説明するかという観点から簡単に述べた。ここで全ての要素を考察できたわけではなく、詳細はまた稿を改めて議論したい。

## 2. 2 母音体系

以上、宮古諸方言の母音の各音素を見てきたが、母音体系ごとに、以下のようにまとめることができる。

- 4 母音体系 : /a, i, u, ɯ/
 

池間
- 5 母音体系 : /a, i, u, o, ɯ/
 

島尻, 伊良部, 砂川, 保良, 野原
- 6 母音体系 : /a, i, e, u, o, ɯ/
 

来間, 久貝, 狩俣, 大浦, 与那覇

## 3 子音

### 3. 1 子音の種類と特徴

ここでは、宮古諸方言の各子音音素ごとに、調査より得られた各地の語例と音価を示す。また、各地で個別に起こった音変化や例外的音対応については、別途語例を提示する。

本稿で用いる調査結果から得られる宮古諸方言の子音の種類は、/p, b, t, d, k, g, ts, s, z, f, v, χ, β, h, ʔ, m, n, ŋ, r, j, w/ である。このうち、/v, m, n, r/ については、音節主音になることができ、長子音として単独で語を形成することもある<sup>25</sup>。基本的に有声と無声の対立がある<sup>26</sup>。

#### 3. 1. 1 破裂音

音声的に、語頭では無声子音が帯気化するという特徴がある。

/p/ 無声両唇破裂音

<sup>25</sup>分析によっては、これらに加え、無声摩擦音の /s, f/, さらに破擦音の /ts, z/ も成節子音とする場合がある。詳細は 2.1.4 節を参照。

<sup>26</sup>脚注 21 にもあるように、大神方言のみ、有声無声の対立をもたない。



宮古祖語 \*p に対応する音で、一部の方言では以下のような変化がみられる。

- 池間：p > h/ [h ~ ɸ ~ ʔ]
- 狩俣，島尻，大浦：p > b/ # \_\_ɿC[ + voiced]（ただし一部の語彙のみ）

表 12 無声両唇破裂音

	A-146	A-139	A-016	A-148	A-033	B-002	B-007
	南	光	髭・毛	左	脚	歯	面
上地	p <sup>h</sup> ai	pɕkal	p <sup>ɕ</sup> igi	pidal ~ pida	pagi	pa:	
与那覇	pai	p <sup>s</sup> ɿkaʔɿ	p <sup>s</sup> ɿgi	p <sup>s</sup> ɿdaʔɿ	p <sup>h</sup> agʔɿ		
久貝	p <sup>h</sup> ai	pskaz	psgi	pzdaz	p <sup>h</sup> aɕi		
伊良部	p <sup>h</sup> ai	p <sup>s</sup> kaɿ	p <sup>s</sup> ɿgi	p <sup>h</sup> idiɿ	p <sup>h</sup> aɕɿ	pa:	mipana ~ miɸana
保良	p <sup>h</sup> ai	pskaɿ	p <sup>s</sup> ɿgi	p <sup>s</sup> ɿdaɿ ~ p <sup>s</sup> ɿdaʔɿ	p <sup>h</sup> a <sup>d</sup> ʔɿ ~ p <sup>h</sup> agʔɿ	p <sup>h</sup> a:	mip <sup>h</sup> ana
国仲	paɪbara	pɿkaɿ	p <sup>h</sup> igi	p <sup>s</sup> idaɿ	pazi		
大浦	p <sup>h</sup> ai	pskaɿ	p <sup>s</sup> ɿgi ~ pɿgi	bʔɿdaɿ	p <sup>h</sup> agɿ ~ p <sup>h</sup> agʔɿ	pa:	nipana
島尻	p <sup>h</sup> ai	pskaʔɿ	bʔɿgi	bʔɿdaʔɿ	p <sup>h</sup> agɿ ~ p <sup>h</sup> agʔɿ	p <sup>h</sup> a:	mipana
来間	p <sup>h</sup> ai	pskaɿ	psgi	A: p <sup>h</sup> idaɿ / B: psdaz	p <sup>h</sup> aɕi		
池間	haibara	ɕɿkai	higi	ɕidai	haɕi	ha:	mihana
狩俣	p <sup>h</sup> ai	pskaw	bzgu ~ bzgi ~ biği	bidaɿ ~ bzdaɿ	p <sup>h</sup> agu	pa	mipana
砂川	p <sup>h</sup> ai	pɕkazɕ	psgi ~ p <sup>s</sup> ɿgi	pɕdaʔ ~ pɕdaɿ	pagʔ		
野原					pagɿ	pa:	mipana

/b/ 有声両唇破裂音

宮古祖語 \*b に対応する音で、各地で安定して /b/ で現れる。

表 13 有声両唇破裂音

	A-007	A-051	A-055	A-091	A-156	A-029
	唇	夫	子供(未成年)	砂糖黍	夕方	お腹
上地	siba	Bikidum ~ bikiɕum	jarabi	bu:gi	jusarabi	
与那覇	sʔɿba	but <sup>h</sup> u		bu:gʔɿ		

久貝	siba	but <sup>h</sup> u	jarabi[新]	bu:g <sup>z</sup> i	jusarabi	bat <sup>h</sup> a
伊良部	sɿba	butu	jarabi	bu:ɕɿ	jusarabi	bata
保良	sɿba	bɔt <sup>h</sup> u	jarabi	bu:g <sup>z</sup> ɿ ~ bu:ɕɿ	jusarabi	bɔata
国仲	sibaya	bɔtu	jarabi	bɔ:ɕi		bata
大浦	NR	butu	jarabi	bu:gɿ ~ bu:g <sup>z</sup> ɿ		
島尻	ʒɿba	butu		bu:gɿ ~ bu:g <sup>z</sup> ɿ		
来間	siba	bikidumu	jarabi	bu:ɕi	jusarabi	bata
池間	fɯtsi	butu	jarabi	bu:ɕi	jusarabi	bata
狩俣	siba	budu	jarabi	bu:gi	jusarabi	bada
砂川	sɔ̥a ~ spa	but <sup>h</sup> u	jarabi	bu:gɕ		
野原						

# /t/ 無声歯茎破裂音

宮古祖語 \*t に対応する音で，一部の方言で以下の変化が見られる。

- 島尻・国仲：t > tɕ / \_\_i
- 狩俣：t > d / C[+voiced]V\_\_

表 14 無声歯茎破裂音

	A-077	A-154	A-177	A-018	B-029
	鳥	朝	土	力	一人
上地	tou	sitɯmuti	mta ~ mtaɕ	taja	
与那覇	tu <sup>z</sup> ɿ	sɿt <sup>h</sup> ɔmoti	mt <sup>h</sup> a	t <sup>h</sup> aja	tɔuk <sup>j</sup> a:
久貝	t <sup>h</sup> uz	stumuti	mta	t <sup>h</sup> aja	tɔfke:
伊良部	t <sup>h</sup> u <sup>z</sup> ɿ ~ t <sup>h</sup> uɿ	stumuti	mta	t <sup>h</sup> aja	tauki:
保良	t <sup>h</sup> ɔɿ	s <sup>h</sup> tɔmoti	mta	t <sup>h</sup> aja	tauk <sup>j</sup> a:
国仲	tɯɿ	sɿtɯmutɕi	nta	taja	ta <sup>v</sup> k <sup>j</sup> a:
大浦	t <sup>h</sup> uɿ	stumuti	nta	t <sup>h</sup> aja	tavk <sup>j</sup> a:
島尻	t <sup>h</sup> u <sup>z</sup> ɿ	stumatɕi	nta	t <sup>h</sup> aja	t <sup>h</sup> afkja:
来間	t <sup>h</sup> uz	stumuti	mta	taja	
池間	tui	ɕitɯmuti	nta ~ mta	taja	tauka:
狩俣	tuw	stumuti	nta	taja	taɸk <sup>j</sup> a:
砂川	tuɕ	stumuti <sub>i</sub> ~ stumuti	mta	taja	tavk <sup>j</sup> a:
野原					taukja:

表 15 狩俣 : t > d / C[+voiced]V\_\_の例

	A-029	A-051
	お腹	夫
上地		bikidum ~ bikidzum
与那覇		but <sup>h</sup> u
久貝	bat <sup>h</sup> a	but <sup>h</sup> u / bikir <sup>h</sup> a[古]
伊良部	bata	butu
保良	ɓata	ɓot <sup>h</sup> u
国仲	bata	bɔtu
大浦		butu
島尻		butu
来間	bata	bikidumu
池間	bata	butu
狩俣	bada	budu
砂川		but <sup>h</sup> u
野原		

/d/ 有声歯茎破裂音

宮古祖語 \*d に対応する。島尻で、d > dʒ / \_\_i という変化がみられる。

表 16 有声歯茎破裂音

	A-005	A-037	A-059	A-111	A-182	A-017
	涙	体	女	枝	戸	腕
上地			midum ~ mi <sup>d</sup> ðum	juda		udi
与那覇			midomu	juda		k <sup>h</sup> aina
久貝	nada / mi:nada	du:	midum	juda	jadu	udi / k <sup>h</sup> aina (肩の痛み)
伊良部	nada	up <sup>h</sup> udu:	midum	ida	jadu	k <sup>h</sup> aina
保良	nada	du:	midom	juda	jadu	udi
国仲	nada	dɔ:	midumɔ	juda		udi
大浦	nada		miduɔ	ida		udi
島尻			miduɔ	juda		udʒi
来間	nada	du:	midumu	ida	jadu	ude

池間	nada	du:	miduŋ	juda	jadu	ti: / 手首 kaina
狩俣	nada	du:	miduŋ	ida	jadu	kaina
砂川			miduŋ	juda		kaina
野原						

# /k/ 無声軟口蓋破裂音

宮古祖語 \*k に対応する音で、各地でさまざまに変化している。

- 狩俣: k > g / C[+voiced]V\_\_<sup>27</sup>
- 伊良部・国仲・来間・池間: k > ts / \_\_ɿ
- k の弱化:
  - 伊良部: k > h ~ x / a\_\_a
  - 島尻: k > χ / a\_\_a
  - 大浦: #aka > #ha:
  - 狩俣: #aka > #ha:, Caka > Ca:

表 17 無声軟口蓋破裂音

	A-126	A-129	A-139	A-164	A-110
	灰	風	光	去年	木
上地	karap <sup>h</sup> aɸ ~ karap <sup>h</sup> aʒ	kaɸi	pɕkal	kuɸu	ki:
与那覇	k <sup>h</sup> arapaʒɿ	k <sup>h</sup> adɸi	p <sup>s</sup> ɿkaʒɿ	k <sup>h</sup> uɸu	ki:
久貝	k <sup>h</sup> arap <sup>h</sup> az	k <sup>h</sup> adɸi	pskaz	kuɸu	ki·
伊良部	k <sup>h</sup> ara paɿ	k <sup>h</sup> adɸi	p <sup>s</sup> kaɿ	k <sup>h</sup> udu	k <sup>h</sup> i:
保良	k <sup>h</sup> arapaɿ ~ k <sup>h</sup> arapaʒɿ	k <sup>h</sup> a <sup>d</sup> ɸi	pskaɿ	k <sup>h</sup> uɸu	k <sup>h</sup> i:
国仲	karapaɿ	kaɸi	pɿkaɿ	kuɸu	ki·
大浦	k <sup>h</sup> arapaɿ	k <sup>h</sup> adɸi	pskaɿ	k <sup>h</sup> u <sup>d</sup> zu	k <sup>h</sup> i:
島尻	karapaʒɿ	k <sup>h</sup> adɸi	pskaʒɿ	k <sup>h</sup> udu	ki:
来間	A: karabaɿ / B: karabaz	k <sup>h</sup> adɸi	pskaɿ	k <sup>h</sup> uɸu	ki:
池間	karahai	k <sup>h</sup> adi	ɕikai	kuɸu	ki:
狩俣	karapau	k <sup>h</sup> adɸi	pskau	kuɸu	ki:
砂川	karapaz	kaɸi	pɕkaz	ku <sup>d</sup> ɸu	ki: ~ ki:
野原					

<sup>27</sup> 表 18 にある、島尻「卵」t<sup>h</sup>unaɸa も、島尻で k > χ / a\_\_a の変化が起る以前に、この変化を受けていたと考えられる。

表 18 狩俣 : k > g / C[+voiced]V\_\_ の例

	A-072	A-079
	雄山羊	卵
上地		tunaka
与那覇		t <sup>h</sup> unaka
久貝	bikip <sup>h</sup> inɕa	tunak <sup>h</sup> a
伊良部	bikipinɕa	k <sup>h</sup> u:ga
保良	ɸikipinɕa	t <sup>h</sup> unaka
国仲	bikipinda	tunuka
大浦		t <sup>h</sup> unaka
島尻		t <sup>h</sup> unaɕa
来間	bikip <sup>h</sup> inɕa	t <sup>h</sup> unuka
池間	bikihinɕa	tunuka
狩俣	bigipinɕa	tunuga
砂川		tɸnaka
野原		

表 19 伊良部・国仲・来間・池間 : k > ts / \_\_ ɿ の例

	A-121	A-163	A-030	A-142
	着物	昨日	心臓・肝	月（天体・暦）
上地	kiŋ	k <sup>s</sup> inu	kɕimu ~ kimu	tsɿkijuː
与那覇	k <sup>s</sup> ɿŋ	k <sup>s</sup> ɿno	k <sup>s</sup> ɿmu	tsɿk <sup>s</sup> ɿ / tsɿk <sup>s</sup> ɿnojuː
久貝	k <sup>s</sup> iŋ	ksinu	k <sup>sɰ</sup> imu	tskssu
伊良部	t <sup>s</sup> ɿŋ	tsɿnuː	tsɿmu	tsɰtsu ~ tsɰtsu(?)
保良	k <sup>s</sup> ɿŋ	k <sup>s</sup> ɿnoː	k <sup>s</sup> ɿmo	tskɿ
国仲	tsiŋ	tsinu	tsimu	tsɿttu
大浦	k <sup>s</sup> ɿŋ	k <sup>s</sup> ɿnu	k <sup>s</sup> ɿmu	tskɿ
島尻	k <sup>s</sup> ɿŋ	k <sup>s</sup> ɿnu	k <sup>s</sup> ɿmu	tskɿ ~ tsk <sup>s</sup> ɿ
来間	tsiŋ	tsino	tsimu	A: tsitsi / B: tsitsinujuː
池間	tsiŋ	Nnu	tsimu	tsitsi
狩俣	k <sup>s</sup> iŋ	ksɿu	k <sup>s</sup> imu	tskssu
砂川	kɕn	kɕnuː	kɰmu ~ k <sup>s</sup> ɿmu	tskɕ
野原				

表 20 k の弱化の例

伊良部 : k > h ~ x / a\_\_a

島尻 : k > χ / a\_\_a

大浦 : #aka > #ha:

狩俣 : #aka > #ha:, Caka > Ca:

	A-100	A-025	A-186	A-066	A-178
	梔	血	墓	蟻	庭
上地	mak <sup>x</sup> al	aχ <sup>ə</sup> tsi ~ ak <sup>ə</sup> tsi	p <sup>ə</sup> ka	ak <sup>x</sup> a:l	
与那覇	mak <sup>h</sup> a <sup>z</sup> ɿ	ak <sup>h</sup> ətsɿ	p <sup>h</sup> aka	aka: <sup>z</sup> ɿ	
久貝	mak <sup>h</sup> azi	akatsi	p <sup>h</sup> əka	ak <sup>ə</sup> a:z	minaka
伊良部	maxaɿ ~ mahaɿ	ax <sup>ə</sup> tsɿ ~ ahatsɿ	p <sup>h</sup> a: ~ p <sup>h</sup> ə:	aha:	minaha
保良	maka <sup>z</sup> ɿ	ak <sup>h</sup> ətsɿ	p <sup>h</sup> əka	a <sup>z</sup> ɿgara (保良) / ak <sup>h</sup> a: (新城)	minaka
国仲	makaɿ	ak <sup>x</sup> ətsi	p <sup>ə</sup> ka	aka:	
大浦	makaɿ	ha:tsɿ	p <sup>h</sup> aka	ha:ɿ ~ xa:ɿ	
島尻	maχaɿ ~ maχa <sup>z</sup> ɿ	aχatsɿ	p <sup>ə</sup> χa	aχa <sup>z</sup> ɿ	
来間	A: makaɿ / B: makaz	A: akatsi / B: a <sup>k</sup> xatsi	p <sup>ə</sup> ka	A: akaɿ / B: akaz	minaka
池間	makai	akatsi	haka	Akai	minaka
狩俣	ma:u	ha:tsi	p <sup>ə</sup> ka	ha:u	a:ra / mina:
砂川	makaz	ak <sup>ə</sup> tsɿ	p <sup>ə</sup> ka	azgara	
野原					

/g/ 有声軟口蓋破裂音

宮古祖語 \*g に対応する音で、各地でさまざまに変化している。

- 伊良部・国仲・来間・池間 : g > dz / \_\_ɿ
- 島尻 : g > ɸ / a\_\_a
- 伊良部 : g > ɸ / a\_\_a

表 21 有声軟口蓋破裂音

	A-016 髭・毛	A-140 蔭	A-174 砂	A-032 膝	A-062 蚊
上地	p <sup>ɕ</sup> igi	kagi	ɲnagu	tsigusi	gaɕam
与那覇	p <sup>ʒ</sup> gi	k <sup>h</sup> agi	nnagu:	tsɪgusɪ	gaɕam
久貝	psgi	k <sup>h</sup> agi	m <sup>ˈ</sup> nagu	tsigusi	gaɕam
伊良部	p <sup>ɕ</sup> gi / fɯtsɪp <sup>ɕ</sup> gi	k <sup>h</sup> a:gi	mnagu	tsɪgusɪ	gaɕam
保良	p <sup>ɕ</sup> gi	k <sup>h</sup> ag	nnagu:	tsɪgusɪ	ga <sup>d</sup> zam
国仲	p <sup>h</sup> igi	ka:gi	ɲnagu	tsigusi	kadam
大浦	p <sup>ɕ</sup> gi ~ pɪgi	k <sup>h</sup> ag	nnagu	sugasɪ	ga <sup>d</sup> zan
島尻	b <sup>ʒ</sup> gi	k <sup>h</sup> agi	nnagu	tugusɪ ~ tugasɪ	gadan
来間	psg	kagi	m:nagu	tsigusi	gaɕam
池間	higi	kagi	nnagu	sɪgusi	kaɕan
狩俣	bzgu ~ bzgi ~ biği	kag	nnagu	tsigası	ga <sup>d</sup> zan
砂川	psg ~ p <sup>ɕ</sup> gi	k <sup>ɕ</sup> gi ~ kag	ɲnagu	tsgusɪ ~ tsɪgusɪ	gaɕam
野原					

表 22 その他 \*g の変化の例

伊良部・国仲・来間・池間 : g > dz / \_\_ɪ

島尻 : g > ɣ / a\_\_a

伊良部 : g > ʃ / a\_\_a

	A-033 脚	A-091 砂糖黍	A-124 鏡	A-143 東
上地	pagi	bu:gi	kagam	ayal
与那覇	p <sup>h</sup> ag <sup>ʒ</sup> ɪ	bu:g <sup>ʒ</sup> ɪ	k <sup>h</sup> agam	aga <sup>ʒ</sup> ɪ
久貝	p <sup>h</sup> aɕi	bu:g <sup>ʒ</sup> i	k <sup>h</sup> agam	aɣaz
伊良部	p <sup>h</sup> aɕɪ	bu:ɕɪ	k <sup>h</sup> aʃam	aʃaɪ
保良	p <sup>h</sup> a <sup>d</sup> zɪ ~ p <sup>h</sup> ag <sup>ʒ</sup> ɪ	bɯ:g <sup>ʒ</sup> ɪ ~ bɯ:ɕɪ	k <sup>h</sup> agam	agaɪ
国仲	pazi	bɯ:ɕi	kagam	agaɪ
大浦	p <sup>h</sup> agɪ ~ p <sup>h</sup> ag <sup>ʒ</sup> ɪ	bu:gɪ ~ bu:g <sup>ʒ</sup> ɪ	k <sup>h</sup> agan	(agaɪ ~) aɪ
島尻	p <sup>h</sup> agɪ ~ p <sup>h</sup> ag <sup>ʒ</sup> ɪ	bu:gɪ ~ bu:g <sup>ʒ</sup> ɪ	k <sup>h</sup> aɣan	aɣaɪ
来間	p <sup>h</sup> aɕi	bu:ɕi	kagam	A: agaɪ / B: agaz

池間	haɕi	bu:ɕi	kagaŋ	agai
狩俣	p <sup>h</sup> agu	bu:gi	k <sup>h</sup> agaŋ	a:u
砂川	pagz	bu:gz	kagaŋ	agaz
野原	pagɭ			

### 3. 1. 2 破擦音

/ts/ 無声歯茎破擦音

宮古祖語 \*ts に対応する音で、ほとんどが /ɭ/ の前に現れる例である。他の母音の前では、方言によって /t/ で現れる語彙もある（島尻「明日」ata など）。

また、伊良部・国仲・保良・池間では、宮古祖語 \*kɭ が /tsɭ/ に変化している。

表 23 無声歯茎破擦音

	A-031 乳	A-025 血	A-142 月（天体・暦）	A-160 明日	A-101 茶碗
上地	tsi	aɕaɕtsi ~ akɕtsi	tsikiju'	aɕa / atɕ	
与那覇	tsɭ:	ak <sup>h</sup> ɕtsɭ	tsɭk <sup>s</sup> ɭ / tsɭk <sup>s</sup> ɭnuju:	atsa	
久貝	tsi'	akatsi	tskssu	attsa	tɕ <sup>h</sup> abaŋ
伊良部	tsɭ:	axɕtsɭ ~ ahatsɭ	ts <sup>s</sup> tsu ~ ts <sup>s</sup> tsu(?)	atsa	tɕabaŋ
保良	tssɭ	ak <sup>h</sup> ɕtsɭ	tskɭ	atsa	tɕabaŋ
国仲	tsi	ak <sup>ɕ</sup> ɕtsi	tsittu	ata	
大浦	tsɭ	ha:tsɭ	tskɭ	atsa	
島尻	tssɭ	aɕatsɭ	tskɭ ~ tsk <sup>s</sup> ɭ	ata	
来間	A: tsi / B: tssi	A: akatsi / B: a <sup>k</sup> xatsi	A: tsitsi / B: tsitsinuju:	atɕa	tɕabaŋ
池間	tsi:	akatsi	tsitsi	atɕa	tɕabaŋ
狩俣	tzi:	ha:tsi	tskssu	atsa	tɕabaŋ
砂川	tsɭ:	akɕtsɭ	tskɕ	atsɕ	
野原					

表 24 伊良部・国仲・保良・池間：tsɭ < \*kɭ

	A-030 心臓・肝	A-121 着物	A-009 息
上地	kɕimu ~ kimu	kiŋ	



与那覇	k <sup>s</sup> ɿmu	k <sup>s</sup> ɿŋ	
久貝	k <sup>sʰ</sup> i <sup>ː</sup> mu	k <sup>s</sup> i <sup>ː</sup> ŋ	ik <sup>s</sup> i
伊良部	肝 tsɿmu	t <sup>s</sup> ɿŋ	itsɿ
保良	k <sup>s</sup> ɿmo	k <sup>s</sup> ɿŋ	ik <sup>s</sup> ɿ
国仲	tsimu	tsiŋ	itsi
大浦	k <sup>s</sup> ɿmu	k <sup>s</sup> ɿŋ	ikɿ
島尻	k <sup>s</sup> ɿmu	k <sup>s</sup> ɿŋ	
来間	tsimu	tsiŋ	A: i <sup>t</sup> si / B: itsi
池間	tsimu	tsiŋ	iki
狩俣	k <sup>s</sup> i <sup>ː</sup> mu	k <sup>s</sup> i <sup>ː</sup> ŋ	ikw
砂川	ksmu ~ k <sup>s</sup> ɿmu	kʂn	
野原			

### 3. 1. 3 摩擦音

/s/

[s]無声歯茎摩擦音

[ç]無声歯茎硬口蓋摩擦音/ \_\_ i

宮古祖語 \*s に対応する音で、i の前では調音点が口蓋寄りになる。

大浦などでは、以下のように変化している。

- 大浦・島尻：\*sɿ > ɿ \ \_\_ C[+voiced]
- 与那覇・保良・大浦：\*s > ts / N \_\_

また、大浦や島尻などで、\*fusV に由来する ssV がある。

表 25 無声歯茎～歯茎硬口蓋摩擦音

	A-156	A-173	A-032	A-113	A-098	A-007	A-008
	夕方	珊瑚礁	膝	草	味噌	唇	舌
上地	jusarabi	pçi ~ pçi	tsigusi	fɯsa	ɱsu	siba	sida
与那覇		çi: / p <sup>h</sup> içi	tsɿgusɿ	fsa	mtsɯ	s <sup>ʰ</sup> ɿba	s <sup>ʰ</sup> ɿda
久貝	jusarabi	pççi	tsi <sup>ː</sup> gusi	fsa	msu	siba	sida
伊良部	jusarabi	pççi	tsɿgusɿ	fɯsa	msu	sɿba	sta
保良	jusarabi	pççi ~ piçi	tsɿgusɿ	fɯsa	mtsɯ	sɿba	sɿda
国仲		piçi	tsigusi	f <sup>h</sup> sa	ɱsɯ	sibaya	sita/sta
大浦		pççi	sugasɿ	ssa	ntsɯ	NR	ɿda~ <sup>ʰ</sup> ɿda

島尻		piçi	tugusɿ ~ tugasɿ	ssa	nsu	ʔba	ʔda
来間	jusarabi	pçi	tsīgusi	fsa	A: m:su / B: m:so	siba	sida
池間	jusarabi	piçi	siḡusi	fusa (= [f <sup>w</sup> sa])	nsu	futsi	ɕta
狩俣	jusarabi	pççi	tsīgasi	fusa	nsu	siba	sta
砂川		piçi	tsgusɿ ~ tsɿḡusɿ	f <sub>s</sub> sa	m <sub>s</sub> su ~ m <sub>s</sub> su	s <sub>ɕ</sub> a ~ s <sub>ɕ</sub> a	sɿda ~ sɿda / sda
野原							

/z/

[z] ~ [dz] 有声歯茎摩擦・破擦音

[ʔ] ~ [dʔ] 有声歯茎硬口蓋摩擦・破擦音 / \_\_ i

宮古祖語 \*z に対応する音で、i の前では調音点が口蓋寄りになる。摩擦音もしくは破擦音の自由変異をもつ。

そのほか、方言ごとに以下のような特徴がある。

- 上地・来間：ɿ の前以外では [ʔ] ~ [dʔ] で現れる。
- 池間：dza<sup>28</sup> di dzu dzɿ
- 島尻・国仲：i, ɿ の前以外では /d/ となる。
- 伊良部・国仲・来間・池間では、\*gɿ が /dzɿ/ に変化している。

表 26 有声歯茎～歯茎硬口蓋摩擦・破擦音

	A-023	A-164	A-062	A-183	A-129
	肘	去年	蚊	門	風
上地	piɕi	kuɕu	gaɕam	ɕoː	kaɕi
与那覇	p <sup>h</sup> iɕɿ	k <sup>h</sup> uɕu	gaɕam	ɕoː	k <sup>h</sup> aɕi
久貝	p <sup>h</sup> iɕi	kuɕu	gaɕam	ɕoː	k <sup>h</sup> aɕi
伊良部	p <sup>h</sup> iɕɿ	k <sup>h</sup> udu	gaɕam	ɕoːvtsɿ	k <sup>h</sup> aɕi
保良	p <sup>h</sup> i <sup>d</sup> ɿ	k <sup>h</sup> uɕu	ga <sup>d</sup> zam	ɕoː (保良) / ɕau (新城)	k <sup>h</sup> a <sup>d</sup> ɿ
国仲	p <sup>h</sup> iɕi	kɿdu	kadam	daɿ	kaɕi
大浦	p <sup>h</sup> iɕɿ	k <sup>h</sup> u <sup>d</sup> zu	ga <sup>d</sup> zan	ɕoːfutsɿ 「入口」	k <sup>h</sup> aɕi
島尻	piɕɿ	k <sup>h</sup> udu	gadan	dau	k <sup>h</sup> aɕi

<sup>28</sup> 表 26 中のデータでは池間「門」dzau となっているが、筆者の調査では dʔau となっている。

来間	pid̥i	k <sup>h</sup> ud̥u	gaɕam	ɕo:	k <sup>h</sup> aɕi
池間	hiɕi	kud̥u	kaɕaŋ	ɕau	k <sup>h</sup> adi
狩俣	pid̥i	kud̥u	ga <sup>d</sup> zaŋ	ɕo:	k <sup>h</sup> aɕi
砂川	piɕɿ ~ pid̥ɿ	ku <sup>d</sup> ɕu	gaɕam	ɕau	kaɕi
野原					

表 27 伊良部・国仲・来間・池間 : g > dz / \_\_ ɿ

	A-033	A-091	A-118
	脚	砂糖黍	釘
上地	pagi	bu:gi	fugi
与那覇	p <sup>h</sup> ag <sup>ɿ</sup>	bu:g <sup>ɿ</sup>	fug <sup>ɿ</sup>
久貝	p <sup>h</sup> aɕi	bu:g <sup>ɿ</sup> i	k <sup>h</sup> anifugz / fugz
伊良部	p <sup>h</sup> aɕɿ	bu:ɕɿ	fuɕɿ
保良	p <sup>h</sup> a <sup>d</sup> zɿ ~ p <sup>h</sup> ag <sup>ɿ</sup>	bu:g <sup>ɿ</sup> ~ bu:ɕɿ	fug <sup>ɿ</sup>
国仲	pazi	bɿ:ɕi	kanifuɕi
大浦	p <sup>h</sup> agɿ ~ p <sup>h</sup> ag <sup>ɿ</sup>	bu:gɿ ~ bu:g <sup>ɿ</sup>	k <sup>h</sup> anifugɿ
島尻	p <sup>h</sup> agɿ ~ p <sup>h</sup> ag <sup>ɿ</sup>	bu:gɿ ~ bu:g <sup>ɿ</sup>	fug <sup>ɿ</sup>
来間	p <sup>h</sup> aɕi	bu:ɕi	fuɕi / k <sup>h</sup> anfuɕi
池間	haɕi	bu:ɕi	kanifuɕi
狩俣	p <sup>h</sup> agw	bu:gi	fugi ~ fugw
砂川	pagɿ	bu:gɿ	fɿgɿ
野原	pagɿ		

#### /f/ 無声歯唇歯摩擦音

宮古祖語の \*f に対応しており、基本的に [f] の音価を持つが、まれに無声両唇摩擦音 [ɸ] で現れることがある。また、下記データ中の「雲」における k は、標準語の影響であると考えられる。

また、大浦などでは、\*fusV が ssV に変化している。

表 28 無声歯唇歯摩擦音

	A-094	A-172	A-132	A-004	A-006
	食べ物	船	雲	額	口
上地	fa <sup>h</sup> munu	fun <sup>h</sup> i	kumu		f <sub>ɸ</sub> tsi
与那覇	fo:munu	foni	fom		f <sub>ɸ</sub> tsɿ
久貝	fo:munu	funi	fumu	ftai	ftsī
伊良部	faɿmunu	funi	fumu	f <sub>ɸ</sub> tai	f <sub>ɸ</sub> tsɿ
保良	faumunu	f <sub>ɸ</sub> ni	f <sub>ɸ</sub> mu	f <sub>ɸ</sub> tai	f <sub>ɸ</sub> tsɿ
国仲	faɿmunu	funi	fumu	f <sub>ɸ</sub> taɪ	f <sub>ɸ</sub> tsi
大浦	fo:munu	funi	k <sup>h</sup> umu	f <sub>ɸ</sub> tai ~ ftai	f <sub>ɸ</sub> tsɿ
島尻	faumunu	funi	fuma		ftsɿ
来間	f <sub>ɸ</sub> :munu	funi	fumu	f <sub>ɸ</sub> ɛ̃	ftsī
池間	faimunu	funi	m <sub>ɸ</sub> mu	ftai	f <sub>ɸ</sub> tsī
狩俣	faumunu	funi	fumu	ftai	f <sub>ɸ</sub> tsī
砂川	faumunu	ɸ <sub>ɸ</sub> n <sup>h</sup> i	ɸ <sub>ɸ</sub> mu		f <sub>ɸ</sub> ts ~ f <sub>ɸ</sub> tsɿ
野原					

表 29 大浦・島尻：\*fusV > ssV

	A-113	A-003
	草	櫛
上地	f <sub>ɸ</sub> sa	fu
与那覇	fsa	f <sup>s</sup> ɿu
久貝	fsa	fsī
伊良部	f <sub>ɸ</sub> sa	f <sub>ɸ</sub> sɿ
保良	f <sub>ɸ</sub> sa	f <sub>ɸ</sub> sɿ
国仲	f <sub>ɸ</sub> sa	fsu
大浦	ssa	s: ~ sɿ:
島尻	ssa	ssɿ
来間	fsa	f <sub>ɸ</sub> sī
池間	f <sub>ɸ</sub> sa (= [f <sup>w</sup> sa])	f <sub>ɸ</sub> ɕi
狩俣	f <sub>ɸ</sub> sa	f <sub>ɸ</sub> sī = f <sup>w</sup> sī
砂川	f <sub>ɸ</sub> sa	f <sub>ɸ</sub> s ~ f <sub>ɸ</sub> sɿ ~ f <sub>ɸ</sub> sɿ
野原		

/v/

[v]有声唇歯摩擦音

[ʋ]有声唇歯接近音

宮古祖語 \*v に対応する音で、頭子音だけでなく音節主音となることができる（池間を除く）。どちらの環境でも、摩擦音と接近音のバリエーションがあり、せばめの度合いが高い方言と低い方言がある。u の後ろでは同化し u となる方言もある（下表「粥」を参照）。

また、一部の語彙で方言間で /f/～/v/ の揺れも観察される。

表 30 有声唇歯摩擦音～接近音

	A-035	A-043	A-095	A-096
	脹脛	お前	油	粥
上地		vva		juv
与那覇	k <sup>h</sup> u:va	ʋva		ju:
久貝	kuvva	vva	avva	juv
伊良部	k <sup>h</sup> uvva	ja:	avva	ɬu:ɕa
保良	kuvva	vva ~ ʋva	avva ~ avva	juv ~ juʋ
国仲	kʊʋva	ʋva	avva	juʋ
大浦	NR	ʋva		juʋ
島尻	kuvva ~ kuʋva	vva		juv
来間	kuvva	vva	avva	juv
池間	kuvva	vva	avva	ju:
狩俣	kuʋva	ʋva	avva	N/R
砂川	kʊʋva ~ kʊʋva	vva		juʋ
野原				

表 31 方言間での /f/～/v/ の揺れ（他方言では /v/ だが上地、久貝、島尻のみ /f/ となる例）

	B-029	A-184/A-149
	一人	前・正面
上地		maf <sup>h</sup> kja:
与那覇	tʊk <sup>h</sup> ja:	maf <sup>h</sup> kja:
久貝	tʌfke:	maf <sup>h</sup> kja ~ maf <sup>h</sup> kja
伊良部	tauki:	maf <sup>h</sup> kja:
保良	tauk <sup>h</sup> ja:	maf <sup>h</sup> kja:
国仲	ta <sup>h</sup> kja:	maf <sup>h</sup> kja:

大浦	tavk <sup>j</sup> a:	
島尻	t <sup>h</sup> afkja:	maf <sup>j</sup> kja:
来間		mo:t <sup>h</sup> u <sup>29</sup>
池間	tauka:	mauk <sup>j</sup> a:
狩俣	taφk <sup>j</sup> a:	maukja: / maf <sup>j</sup> k <sup>j</sup> a
砂川	tavk <sup>j</sup> a:	mavkja: ~ mavkja:
野原	taukja:	

/h/

[h]無声声門摩擦音 /\_\_a

[ç]無声硬口蓋摩擦音 /\_\_i

[φ]無声両唇摩擦音 /\_\_u

以下の二つの由来をもつ。

- \*p: 池間のみ, /p/ が /h/ に変化している
- \*k (a に隣接するもののみ) : 伊良部, 狩俣など

例は表 12 を参照。

/χ/ 無声口蓋垂摩擦音 [χ]

島尻のみでみられる音で, <\*aka における \*k から変化したもの。例は表 20 を参照。日本列島で唯一の例。

/ʁ/ 有声口蓋垂摩擦音 [ʁ]

島尻のみでみられる音で, <\*aga における \*g から変化したもの。例は表 22 を参照。日本列島で唯一の例。

/ʕ/ 有声咽頭摩擦音 [ʕ]

伊良部のみで見られる音で, <\*aga における \*g から変化したもの<sup>30</sup>。例は表 22 を参照。日本列島で唯一の例。

<sup>29</sup>その他の方言で示されているものとは別の由来をもつ語。

<sup>30</sup>これまでは声門閉鎖音として記述されていたものに相当する。

### 3. 1. 4 鼻音

/m/ 有声両唇鼻音

宮古諸方言 \*m に対応。音節の頭子音の場合は両親鼻音だが、成拍的な場合（音節の中核もしくは末子音）となる場合は、調音点を失って /n/ に同化する、日本語の「撥音」にあたる音になる方言もある（大浦，島尻，池間，狩俣）。

表 32 有声両唇鼻音

	A-030 心臓・肝	A-071 馬	A-127 水	A-130 竜巻	A-187 あそこ
上地	kçimu ~ kimu	nu:ma	miɕi	amainoŭ	kama
与那覇	k <sup>s</sup> ɿmu	no:ma	mi <sup>d</sup> zɿ	amaino:	k <sup>h</sup> ama
久貝	k <sup>sz</sup> i'mu	nu:ma	miɕi	ama.ino:	k <sup>h</sup> ama
伊良部	tsɿmu	nu:ma	mi <sup>d</sup> zɿ	amaino:	k <sup>h</sup> ama ~ k <sup>h</sup> ama:
保良	k <sup>s</sup> ɿmo	no:ma	mi <sup>d</sup> zɿ	amaino:	k <sup>h</sup> ama
国仲	tsimu	nɯ:ma	miɕi	amainau	kama
大浦	k <sup>s</sup> ɿmu	numa	miɕɿ	amaino:	k <sup>h</sup> ama
島尻	k <sup>s</sup> ɿmu	nu:ma	miɕɿ	amaino:	kama
来間	tsimu	nu:ma	miɕi	ama.ino:	kama
池間	tsimu	nu:ma	miɕi	amaunau	kama
狩俣	k <sup>s</sup> i'mu	nu:ma	mi <sup>(d)</sup> zi	ino:	kama
砂川	ksmu ~ k <sup>s</sup> ɿmu	nu:ma <sub>ɕ</sub>	miɕɿ	amainau	k <sup>h</sup> a <sub>ɕ</sub> ma:
野原					

表 33 成拍的な場合（音節の中核と末尾）

	A-170 海	A-062 蚊	A-059 女	A-098 味噌	A-177 土
上地	im	gaɕam	midum ~mi <sup>d</sup> ðum	msu	m̥ta ~ m̥ta <sub>ɕ</sub>
与那覇	im	gaɕam	midomu	mtsu	mt <sup>h</sup> a
久貝	im	gaɕam	midum	msu	m̥ta
伊良部	im	gaɕam	midum	msu	mta
保良	im	ga <sup>d</sup> zam	midom	mtsu	mta
国仲	im	kadam	midum	n̥sɯ	n̥ta
大浦	iŋ	ga <sup>d</sup> zaŋ	miduŋ	ntsu	nta

島尻	iŋ	gadaŋ	miduŋ	nsu	nta
来間	im	gaɖam	midumu	A: m:su / B: m:so	mta
池間	iŋ	kaɖaŋ	miduŋ	nsu	nta ~ mta
狩俣	iŋ	ga <sup>d</sup> zaŋ	miduŋ	nsu	nta
砂川	im	gaɖam	midum	msu ~ msu	mta
野原					

/n/

[n]有声歯茎鼻音

[ŋ]有声軟口蓋鼻音 /\_\_#

宮古諸方言 \*n に対応する音。音節の頭子音の場合は有声歯茎鼻音。成拍的な場合（音節の中核もしくは末子音）となる場合は、調音点が後節する音素に同化する、日本語の「撥音」にあたる音になる。

表 34 有声歯茎鼻音

	A-172	B-054	A-131	A-079	A-028
	船	花	地震	卵	骨
上地	fun <sup>j</sup> i		nai	tunaka	puni
与那覇	funi		nai	t <sup>h</sup> unaka	puni
久貝	funi		nai	tunak <sup>h</sup> a	p <sup>h</sup> uni
伊良部	funi	pana	nai	k <sup>h</sup> u:ga	p <sup>h</sup> uni
保良	funi	p <sup>h</sup> ana	nai	t <sup>h</sup> unaka	p <sup>h</sup> uni ~ poni
国仲	funi		nai	tunuka	puni
大浦	funi	pana	nai	t <sup>h</sup> unaka	p <sup>h</sup> uni
島尻	funi	p <sup>h</sup> ana	nai	t <sup>h</sup> unaka	p <sup>h</sup> uni
来間	funi		nai	t <sup>h</sup> unuka	p <sup>h</sup> uni
池間	funi	hana	nai	tunuka	huni
狩俣	funi	pana	naw	tunuga	p <sup>h</sup> uni
砂川	ɸun <sup>j</sup> i		nai	tunaka	pun <sup>j</sup> i ~ p <sup>h</sup> uni
野原		pana			



表 35 有声軟口蓋鼻音（語末）

	A-101	A-121
	茶碗	着物
上地		kiŋ
与那覇		k <sup>s</sup> ŋ / k <sup>s</sup> ŋmɔnɔ
久貝	tɕ <sup>h</sup> abaŋ	k <sup>s</sup> iŋ
伊良部	tɕabaŋ	t <sup>s</sup> ŋ
保良	tɕabaŋ	k <sup>s</sup> ŋ
国仲		tsiŋ
大浦		k <sup>s</sup> ŋ
島尻		k <sup>s</sup> ŋ
来間	tɕabaŋ	tsiŋ
池間	tɕabaŋ	tsiŋ
狩俣	tɕabaŋ	k <sup>s</sup> iŋ
砂川		kʂn
野原		

/ŋ/

[ŋ]無声齒茎鼻音

[m̥]無声両唇鼻音 / \_\_C[+labial]

池間のみに見られる音。それぞれ, \*tsɿNV > ŋNV\*fum > m̥mV という出自である。

日本で唯一の例。（下記池間「角」「昨日」 nnu は共に ŋnu の誤りかと思われる。）

表 36 無声齒茎～両唇鼻音

	A-132	A-073	A-163
	雲	角	昨日
上地	kumu	tsinu	k <sup>s</sup> inu
与那覇	fom	tsɿnɔ	k <sup>s</sup> ɿnɔ
久貝	fumu	tsinu	ksinu
伊良部	fumu	tsɿnu ~ tsɿno	tsɿnu:
保良	fomɔ	tsɿnɔ	k <sup>s</sup> ɿnɔ:
国仲	fumu	tsinu	tsinu
大浦	k <sup>h</sup> umu	tsɿnu	k <sup>s</sup> ɿnu

島尻	fuma	tsɿnu	k <sup>s</sup> ɿnu
来間	fumu	tsĩnu	tsĩno
池間	ɱmu	nnu	nnu
狩俣	fumu	tsɰu	ksɰu
砂川	ɸɰmu	tsnu ~ tsɿnu	kɰnu:
野原			

### 3. 1. 5 流音

/r/ 有声歯茎弾き音

宮古祖語の \*r に対応する。頭子音の場合は、各地で安定して [r] で現れる。このほか、成拍的音となることができ、その場合は歯茎側面接近音 [ɭ] で現れる方言もある（国仲）<sup>31</sup>。

表 37 有声歯茎弾き音

	A-055	A-092	A-156
	子供（未成年）	鎌	夕方
上地	jarabi	<sup>i</sup> zzara	jusarabi
与那覇		zzara	
久貝	jarabi[新]	zzara	jusarabi
伊良部	jarabi	ɿzara	jusarabi
保良	jarabi	zzara	jusarabi
国仲	jarabi	<sup>i</sup> zzara	
大浦	jarabi	<sup>z</sup> ɿzara	
島尻		zzara	
来間	jarabi	zzara	jusarabi
池間	jarabi	zzara ~ <sup>d</sup> zara	jusarabi
狩俣	jarabi	izara	jusarabi
砂川	jarabi	zzara	
野原			

<sup>31</sup> 成拍的な /r/ は、\*rɿ を由来とする。表 10 では上地や来間でも側面音が表われているが、それらは音韻論的に /ɿ/ にあたるものである。

表 38 国仲：成拍的 /r/

	A-077 鳥	A-155 昼間	A-126 灰	A-139 光	A-143 東
上地	tou	p <sup>s</sup> ima	karap <sup>h</sup> aɿ ~ karap <sup>h</sup> a <sup>z</sup>	pɕkal	aɣal
与那覇	tu <sup>z</sup> ɿ	p <sup>s</sup> ɿma	k <sup>h</sup> arapa <sup>z</sup> ɿ	p <sup>s</sup> ɿka <sup>z</sup> ɿ	aga <sup>z</sup> ɿ
久貝	t <sup>h</sup> uz	psima	k <sup>h</sup> arap <sup>h</sup> az / p <sup>h</sup> az(i)	pskaz	aḡaz
伊良部	t <sup>h</sup> u <sup>z</sup> ɿ ~ t <sup>h</sup> uɿ	p <sup>s</sup> ɿ:ma	k <sup>h</sup> ara paɿ	p <sup>s</sup> kaɿ	aɬaɿ
保良	t <sup>h</sup> uɿ	p <sup>s</sup> ɿ:ma	k <sup>h</sup> arapaɿ ~ k <sup>h</sup> arapa <sup>z</sup> ɿ	pskaɿ	agaɿ
国仲	tɯɿ	p <sup>h</sup> iɿ:ma	karapaɿ	pɿkaɿ	agaɿ
大浦	t <sup>h</sup> uɿ	p <sup>s</sup> ɿma	k <sup>h</sup> arapaɿ	pskaɿ	(agaɿ ~) a:ɿ
島尻	t <sup>h</sup> u <sup>z</sup> ɿ	p <sup>s</sup> ɿnaɣa / p <sup>s</sup> ɿma	karapa <sup>z</sup> ɿ	pska <sup>z</sup> ɿ	aɬaɿ
来間	t <sup>h</sup> uz	pssima	A: karabaɿ / B: karabaz	pskaɿ	A: agaɿ / B: agaz
池間	tui	hi:ma	karahai	ɕɿkai	agai
狩俣	tuw	psm <sub>ɕ</sub> a	karapaw	pskaw	a:w
砂川	tuz	p <sup>s</sup> ɿ:ma	karapaz	pɕkaz <sub>ɕ</sub>	agaz
野原					

### 3. 1. 6 接近音

/j/ 有声硬口蓋接近音

宮古祖語の \*j に対応する。

表 39 有声硬口蓋接近音

	A-055 子供（未成年）	A-111 枝	A-165 昔	A-179 家	A-182 戸
上地	jarabi	juda	ɲkja:ɲ		
与那覇		juda	ɲk <sup>i</sup> a:ɲ		
久貝	jarabi[新]	juda	ɲkja:ɲ	ja:	jadu
伊良部	jarabi	ida	mki:ɲ	ja:	jadu
保良	jarabi	juda	ɲk <sup>i</sup> a:ɲ	ja:	jadu
国仲	jarabi	juda	ɲkja:ɲ		
大浦	jarabi	ida	ɲk <sup>i</sup> a:ɲ	ja:	
島尻		juda	ɲkja:ɲ		

来間	jarabi	ida	ŋkja:ŋ	ja:	jadu
池間	jarabi	juda	ŋk <sup>h</sup> a:ŋ	ja:	jadu
狩俣	jarabi	ida	ikja:ŋ	ja:	jadu
砂川	jarabi	juda	ŋkja:ŋ		
野原					

#### /w/ 有声両唇軟口蓋接近音

日琉祖語から宮古祖語への変化の過程で **w** は **b** に変化しているため、例はごくわずかで、母音 /a/ のみが後続する。「豚」などの限られた語彙のみに出現し、**v** と相補分布しているため、**v** の異音である可能性がある。実際に、多くの方言では[**w**]ではなく[**v**]に近い接近音[**ʋ**]が現れる（与那覇、久貝、保良、島尻、砂川）。その他の方言では重子音、末子音（末子音）、音節核の場合は **v** になり、単子音頭子音の場合は **w** となっていると考えられる<sup>32</sup>。

表 40 有声両唇軟口蓋接近音

A-075	
豚	
上地	wa:
与那覇	va:
久貝	va:
伊良部	wa:
保良	va: ~ wa:
国仲	wa:
大浦	wa:
島尻	va:
来間	wa:
池間	wa:
狩俣	wa:
砂川	va:
野原	

<sup>32</sup> この理由によって Pellard (2009: 336) では\***v** と再建している。

### 3. 1. 7 喉頭化音の有無について

平山(編)1983 などでは一部の方言に /tʰ, tsʰ, kʰ/ の喉頭化音があるとしている。確かに音声的に北琉球に広く存在する喉頭化音に近いものが観察されるが、語頭のみであり、母音を伴って 2 モーラ分の長さを持つ（島尻「人」 ttu<sup>33</sup>）。このため弁別的な要素は長さにあり、喉頭の緊張はそれが閉鎖音であるために音声的に表われるもので、音韻的には重子音として解釈すべきと考えられる<sup>34</sup>。また、北琉球の喉頭化音と異なり、母音の喪失のみに由来している（例：島尻「人」 ttu < 宮\**pɿtu*）。これに対応する音は以下のように表われる。

[tʰ]~[tt]：池間「煙管」，島尻「人」

[kʰ]~[kk]：池間「九つ」（報告データ上で kukunutsi とあるが，kkunutsi というバリエーションも存在する）

[tsʰ]~[tts]：池間「ソテツ」，伊良部「煙管」

表 41 音声的に喉頭化音に近い音が現れるもの

	A-060	B-113	B-027	B-076
	人	煙管	九つ	ソテツ
上地	pɿsu			
与那覇	pʰɿtʰu			
久貝	pstu			
伊良部	pstu	ttɕ(ɿ)z	kukunutsɿ	sditsɿ
保良	pstu	kʰiɕi:ɿʰz	kukunutsi	ɕukʰatsɿ
国仲	pʰɿtu		kɔkɔnɔtsi	sɔtetsi
大浦	pstu	kiɕiʰɿ	kukunutsɿ	
島尻	ttu	kiɕiɿ	kɿkukunutsɿ	
来間	pstu			
池間	pʰɿtu ~ ɕtu ~ ɕto	tʰi: tti:か	kɿkukunutsɿ	ttɕu:tsɿ
狩俣	pstu	kʰisiu	kɿkukunutsu	stɿtsu/sɿsudzɿ/ssudzɿ
砂川	pstɿ ~ pstɿ			
野原		kiɕiʰɿ	kɿkukunutsɿ	sotetsɿ

<sup>33</sup> 宮古諸方言では語は最小で 2 モーラである。

<sup>34</sup> 名嘉真 1984 にもこの見解が示されている。また、与那国などの喉頭化音と異なり、規則的ではなく語彙的な変化で数が少なく、一部の方言の一部の語彙に現れるのみである。

### 3. 2 子音体系

以上、宮古諸方言の子音を音素ごとに見てきたが、子音体系という点からは、以下のよう  
にまとめることができる。

- 全ての方言がもっている音素

/p, b, t, d, k, g, ts, s, z, f, v, h, m, n, r, j, w/

- 一部の方言だけが持っている音素

- /χ/ : 島尻
- /ʁ/ : 島尻
- /ʕ/ : 伊良部
- /ŋ/ : 池間

## 4 音節

現在のところ、宮古諸方言において音節を主要な音調規則の単位としてとりあげている報告はない。ここでの音節は、主に形態音韻論や音素配列上の記述の単位として用いるものである<sup>35</sup>。

音節構造は2.1.4節で議論した成節子音をどの程度認めるか、また前節に述べた喉頭化音を認めるかどうかとも連動しており、さまざまな解釈がある。ここでは、成節子音は/v, m, n, r/のみとし3.1節にあるように語頭の重子音をみとめる立場をとるので、音節構造は(5)のようになる。

(5) i) (C<sub>1</sub>)(C<sub>2</sub>)(j)V(V)(C<sub>3</sub>)

ii) (C<sub>4</sub>)C<sub>5</sub>(C<sub>6</sub>)

このうち、i) が母音が音節核となるもの、ii) が子音が音節核となるものを示している。

- C<sub>1</sub>C<sub>2</sub> 双方が埋まる場合は、摩擦音もしくは共鳴音 /s, z, f, v, m, n, r/ の重子音<sup>36</sup>もしくはC<sub>1</sub>を /v, m/ とする部分重子音となる。また、池間や島尻、伊良部

<sup>35</sup> 従って、例えば CCV の一つ目の C が1モーラの長さを持つなど、一般的な音節の理論には当てはまらない性質もある。

<sup>36</sup> 「虱」 ssam や「子」 ffa などの重子音は狭母音の摩擦化->後続流音、半母音の同化によって生じたものと2.1.4節で述べた。同じ音変化を経た名詞形態音韻論の解釈においてはこの摩擦化する母音をそのまま残している半面、前者のような場合は母音のない重子音としている。これは、前者がすでに終わった変化であり、名詞形態論と同様の共時的分析をする必要がないこと、また島尻「人」 ttu のような語頭の閉鎖音の重子音のために CCV という音節が必要であり、「虱」 ssam などにもそれを適応することができるためである。

などでは、**t**, **k**, **ts** などの破裂音・破擦音も重子音として **C<sub>1</sub>C<sub>2</sub>** を埋めることができる。

例) 「虱」 **ssan**, 「子」 **ffa**, 「土」 **nta**, 「人」 **ttu**

- **C<sub>3</sub>** には **/v, m, n, r/** がはいる (**r** は国仲のみ。また、池間のみ、**v** はここに入らない。 ) 。
- **VV** には長母音，異なる母音の連続両方が入りうる。しかし，方言によってどのような母音連続が存在するのか（しないのか）などは，本稿では扱えていない。
- **C<sub>6</sub>** には **C<sub>5</sub>** と同じ子音が入る（＝長子音）。**C<sub>5</sub>** にたつことのできる子音は，**/v, m, n, r/** である（池間のみ，**v** はここに入らない）。また，**C<sub>4</sub>** をもてるのは **/r/** のみ（国仲）で，**C<sub>4</sub>** には唇音 (**p, b, m**) のみが入る。

例) 「売る」 **vv**, 「芋」 **mm**, 「蕐」 **mrrna** (**[m]:na~mi[:na]**)

#### 参考文献

- 青井隼人 (2010) 「南琉球方言における「舌先の母音」の調音的特徴：宮古多良間方言を対象としたパロットグラフィ調査の初期報告」『音声研究』14(2): 16–24.
- 青井隼人 (2012) 「南琉球宮古方言の音韻構造」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』8 : 99-113.
- Hayashi, Yuka (2011) Ikema (Ikema Ryukyuan). In Shimoji, Michinori and Pellard, Thomas (eds.) *An Introduction to Ryukyuan language*, 167–188. Tokyo, ILCAA: 167–188.
- 平山輝男 (1964) 「琉球宮古方言の研究」『国語学』56: 61-73.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』東京: 明治書院.
- 平山輝男 (編) (1983) 『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』東京: 桜楓社.
- 五十嵐陽介, 田窪行則, 林由華, ペラルル・トマ, 久保智之 (2012) 「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16-1: 134-148.
- Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1952) *Preliminaries to Speech Analysis*. Cambridge MA: MIT Press.
- 加治工真市 (1989) 「宮古方言音韻論の問題点」『沖縄文化：沖縄文化協会創設40周年記念誌』421–439.
- かりまたしげひさ (1986) 「宮古方言の「中舌母音」をめぐって」『沖縄文化』22(2) : 54–64.
- かりまたしげひさ (1987) 「宮古方言の成節的な子音をめぐって」琉球方言研究クラブ 30周年記念会編『琉球方言論叢』419-429.
- かりまたしげひさ (1996) 「宮古方言の音韻変化についてのおぼえがき-空気力学的な観点か

- らみて-」『言語学林』96-97: 709-722.
- かりまたしげひさ(2005)「沖縄県宮古島平良方言のフォネーム」『日本東洋文化論集』11: 67-113.
- かりまたしげひさ(2007)「琉球語音韻変化の研究」京都大学特別講義資料.
- 北村＝サムエルH.(1960)「宮古方言音韻論の一考察」『国語学』41: 94-105.
- Ladefoged, Peter and Ian Maddieson (1996) *The sounds of the world's languages*.  
Oxford: Blackwell.
- 仲原穰(2001)「沖縄宮古島保良方言の音韻」『琉球の方言』26: 105-123.
- 名嘉真三成(1984)「宮古のことば」『新沖縄文学』61:121-127. 沖縄タイムス社.
- 名嘉真三成(1992)『琉球方言の古層』東京: 第一書房.
- 大野真男・久野眞・杉村孝夫・久野マリ子(2000)「南琉球方言の中舌母音の音声実質」  
『音声研究』4(1): 28-35.
- Pellard, Thomas (2009) *Ōgami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū*.  
Ph.D. dissertation, École des hautes études en sciences sociales.
- Pellard, Thomas (2011) *Ōgami (Miyako Ryukyuan)*. In Shimoji, Michinori and Pellard, Thomas (eds.) *An Introduction to Ryukyuan languages*, 113-166. Tokyo, ILCAA.
- 崎山理(1963)「琉球宮古方言の舌尖母音をめぐって」『音声学会会報』112(2):18-19.
- 崎山理(1965)「平山輝男氏論批判琉球宮古方言の舌尖母音をめぐって」『国語学』60.
- 沢木幹栄(2000)「宮古方言の問題点」『音声研究』4(1): 36-41.
- 下地賀代子(2003)「宮古多良間方言の音韻及びその変化の現象」『琉球の方言』28: 93-113.
- Shimoji, Michinori (2008) *A grammar of Irabu, a southern Ryukyuan language*.  
Ph.D. dissertation, The Australian National University.
- Shimoji, Michinori (2011) *Irabu Ryukyuan*. In Yamakoshi, Yasuhiro (ed.) *Grammatical sketches from the field Tokyo*, 77-131. Tokyo: ILCAA.
- Shimoji, Michinori and Pellard, Thomas (eds.) (2011) *An Introduction to Ryukyuan language*.  
Tokyo: ILCAA.
- Thorpe, Maner L. (1983) *Ryūkyūan Language History*. Ph.D. dissertation, University of Southern California.
- 上村幸雄1997「音声研究と琉球方言学」『ことばの科学』8: 17-47.
- Zec, Draga (2007) *The Syllable*. In Paul de Lacy (ed.) *The Cambridge handbook of phonology*, 161-194. Cambridge: New York, Cambridge University Press.